【資料２】

「令和５年度学校関係者評価委員会における委員の意見　それに対する本校の対応方針」に対する対応状況

評価項目	評価	委員の意見等	対応方針	令和５年度対応状況
（１）教育理念・目標	４（適切）	・ 高校生が林業に携わっていく夢のようなものをアカデミーが提言してもらえると興味、関心が高まると思う。	・ ホームページ、SNS 等でのアカデミーの取り組み発信、オープンキャンパスや農林高校生の視察受け入れを実施する中で、興味、関心が得られるよう、引き続き内容を検討しながら対応していく。	・ オープンキャンパス（3 回）の実施、農林高校生の視察の受け入れ（4 回）、ホームページへの活動報告掲載（305 件）等により、アカデミーや林業に興味・関心を持ってもらえるよう積極的に情報発信した。
（２）学校運営	４（適切）	・ アカデミーの 20 年後の将来像が考えられているが、社会の動きがめまぐるしく３年先のこともわからない状況で、短期的な視点も必要ではないか。 ・ 今後のアカデミーのあり方の検討について、森林という長いスパンのものを扱う学校として、長期的な視点、普遍性を踏まえつつ、フレキシブルに適用するような形での対応、柔軟さを持って検討いただくと良い。	・ 20 年後という中長期的な将来展望を見据えつつ、毎年、前年度に取り組んだ内容を検証し、改革を継続していく。	・ 20 年後を見据えた「森林文化アカデミービジョン 2040」を取りまとめ、時代の変化に合わせ、ビジョンも常に見直していくこととした。
		・ 教職員の評価について、社会的な評価が厳しくなっている中で、教職員が伸び伸びとしっかりと教えていける評価の枠組みが必要だと思う。	・ 教職員自身が組織目標に沿った業務目標を設定し、その目標に対する成果を評価する。教員の業務は定量的な目標設定は難しいが、教員との面談を通じ、より適した目標を設定するよう努める。	・ 教職員が自ら設定した目標について面談によりヒアリングを行い、期末には再度面談し達成状況を確認した。
（３）教育活動	４（適切）	・ 急遽休講になることがあったので、授業スケジュールをしっかり組み立てて欲しい。	・ 止むを得ず授業日程の変更が必要となる場合もあるが、その際は受講	・ 授業の日程変更は、教務委員会に図り、時間が重ならないよ

			講義の日程が重ならないよう教務委員会で調整していく。	う調整した。
		・ 資格をたくさん取得できるのでありがたいが、毎年同じ資料を授業で使うせいか、古いままの情報になっているところがあったようである。	・ 最新の情報で授業を行うよう徹底する。	・ 資格担当教員には最新の情報とするよう申し合わせ、授業を実施した。
		・ 現地現物主義ということがこの学校の本当に良いところと思うので、特に樹木同定や木材同定の実習は、今後も内容を充実していただきたい。	・ 令和 4 年度から、樹木だけでなく木材も同定することで、樹木の生態や利用をより深く学べるよう見直した。今後も教務委員会を中心に検討し、内容を充実していく。	・ 樹木・木材同定の授業は引き続き実施し、授業時間外にも機会をとらえて樹木同定の学習の場とするよう努めた。また、実際の事業地にいて林業の作業システムを検討する「事業プランの作成実習」を開講するなど、教務委員会を中心に、実務的な科目の充実を図った。
		・ J クレジットなどの森林環境施策や森林サービス産業など、県や国が旗を振ってもなかなか動かない状態だ。アカデミーでもある程度そういったことを普及していくため、カリキュラムにあっても良いと思う。	・ 授業で取り組む内容は社会情勢に応じて常に見直していく必要があると考えている。J-クレジットや森林サービス産業など施策的なものについても、行政職員等を講師とし、最新の施策方針や方向性を学生に知っていただくよう努める。	・ 県主催のセミナーやシンポジウムの開催情報を学生に伝えて参加を促し、国や県の施策の状況、方向性等に関する学びの機会を提供した。
		・ 「社会人としてのマナー講座」はどのような内容か。山の仕事はチームプレーが必要であり、コミュニケーションが取れ、グルー	・ 「社会人としてのマナー講座」では就職を控えたエンジニア科 2 年生を対象に、社会人としての心構えやコミュ	・ 「自力建設」や「チームビルディング」を実施し、仲間との信頼関係を築き、チームとして課題

		プで共働できる人が求められる。社会できちんと適応できる人を育てることも、学校としては大事だと思う。人間関係的なことにも力を入れていただけると、就職してからもうまくやっていけるのではないかと思う。	ニケーション等について学習した。人間関係については、学生生活や授業のグループワークにおいても重要と考え、開学以来重要視して取り組んでいる「自力建設」をはじめ、「チームビルディング」など、仲間との信頼関係を築き、チームとして課題を克服する大切さを体験する科目を設けており、今後も継続して取り組んでいく。	を克服する大切さを体験した。また、「社会人としてのマナー講座」も引き続き実施した。
		・ 女性教員の採用について、県の方針もあるだろうが、社会情勢を見ると採用目標を設定する等、考える必要があるかもしれない。	・ 現時点では県の職員と同様、女性を優遇する募集はしていないが、女性の応募を期待しているところである。	・ 林業専攻において、今年度募集した教員の中で女性教員を 1 名採用することができた。
（４）学習成果	３（ほぼ適切）	・ 卒業生の就職先について、どの程度定着しているか追跡調査が必要ではないか。	・ 就職後の定着状況は、緑の雇用事業対象者を除き把握していないため、企業説明会への参加企業等の協力を得て状況を調査していく。	・ 企業説明会への参加 28 事業体のうち、エンジニア科から過去3年間に就職したのは 12 事業体へ 23 名であり、令和 5 年度末現在、在職者は 21 名、離職者は 2 名である。
		・ 企業説明会を介してインターンシップに来る学生がいるため、早い時期に説明会を実施することはとても有効。対応する企業側もそれなりの人員を動員することになるが、是非実施して欲しい。	・ エンジニア科 2 年生のインターンシップは 7 月前半と 8 月後半の 2 回実施している。インターンシップ先は企業の事業内容を把握してから決められるよう 4～6 月に企業説明会を実施しており、今後も継続していく。	・ 4～6 月に企業説明会を実施し、エンジニア科 2 年生のインターンシップを 7 月前半と 8 月後半の 2 回実施した。企業説明会参加 28 事業体のうち 15 事業体に延べ 23 名がインターン生とし

		・ アカデミーの卒業生に聞いところ、「就職活動する時に学生は一社しか見てない、複数の企業から選ぶ感じはなかった」、ということだった。学生からすると活躍の場を狭めていると思う。	・ エンジニア科 2 年生はインターンシップの授業が 2 回、複数の企業を体験、比較する機会が用意されている。企業側からは、単なる見学のようなインターンシップなら受け入れを遠慮したい、という意見もあるため、学生には自分の思いをしっかり持ってインターンシップに行くよう指導している。また今年度からは、既に内定を得ている学生が他の企業へインターンシップに行く場合は、事前に受け入れ可能か確認をとるよう取り組んでいる。今後も学生が複数の企業から就職先を選択できるよう機会を設けていく。	て就業経験し、10 名がインターン先の 9 事業体に就職した。 ・ 学生によっては、上記期間外にもインターンシップを実施しており、内定が出ていた学生を除き、1名あたり 2～5 事業体で就業体験した。
（５）学生支援	４（適切）	・ 市町村に森林環境譲与税を利用した学生への支援制度の創設を依頼した結果はどうか。文書を送っただけでは難しいかもしれない。具体的に説明しなければ予算に組み込まれないと思う。 ・ 救急救命法の授業を実施しているということだが、現場でのちょっとした怪我やヒルにかまれた時などへの対応も一緒に教えてもらえると良いと思う。	・ 昨年 12 月に文書依頼したが、新たに創設いただくまでには至っていない。林政部とも連携しながら、県内市町村に対して学生への支援を働きかけていく。 ・ 救急救命法の授業では、ハチ、マムシ等への対応を含め応急処置の方法を学んでいるが、必要に応じて内容を充実していく。	・ 3 市町（美濃市、飛騨市、白川町）については、連携協定期間を延長することができ、学生への支援制度についても継続されることとなった。 ・ 救急救命法の授業では林内作業を想定した切創、日射病、ハチ・マムシ等の危険生物への対処方法、傷病者の搬送方法

				など、救急救命に関わる内容を教え、ヒルについては林業の授業等で、忌避剤やかまれたときの対処法を教えた。
（６）教育環境	３（ほぼ適切）	・ 寒さ対策の他、「ロッカー室が汚く、ものを入れておくとカビが発生してしまう、特に今の時期は湿っぽくて使うことができない。」と聞いている。対策をしていただけるとありがたい。また、「トイレ掃除がいきとどいていないことがある」とも聞いている。	・ 課題となっている断熱対策も含めた校舎改修については、調査を進め計画していく。 ・ 定期的に清掃するとともに、ロッカー室やトイレなどを清潔に使用するよう指導していく。	・ 課題となっている断熱対策も含めた校舎改修については、令和5 年度から実施している調査結果を踏まえ、今後改修計画を立てていく。 ・ 今年度学生に対してゴミ出しのルールを周知し、適切に清掃するなど、ロッカー室やトイレを清潔に使用するよう指導した。
（７）学生の受入れ募集	４（適切）	・ 受験資格でエンジニア科は高卒程度、クリエーター科は22歳以上となっており、エンジニア科からクリエーター科に進学の可能性があることがわからないのではないか。 ・ 林業や木に関して興味を持ってもらうには、小さいころからの木育が本当に大事だと思う。岐阜県は木遊館や木育ひろばが充実しているが、施設から遠くに住む小さい子供さんを連れた人達は利用しにくい。	・ 一定の条件を満たせば特例としてエンジニア科卒業後クリエーター科への受験資格を与える仕組みを用意し、意欲のあるエンジニア科学生に門戸を開いている。この仕組みをオープンキャンパス等で情報提供していく。 ・ 「森の出番」の年間計画は、教育委員会を通して県内の学校の実施希望を調査し、森林総合教育センターで決定している。希望は非常に多いため、初めての学校には優先的に出	・ オープンキャンパス等で情報提供した。また、エンジニア科の入学案内にも進路にクリエーター科があることを記載しており、これらの媒体を活用し周知に努めた。 ・ 「森の出番」では、全 42 回、32 施設に行きプログラムを届けた。そのうち新規には、小学校4校、中学校1校、こども園・保育園 6 園の 11 施設に出向いた。

		「森の出番」のような車でプログラムを届けるのは良いと思う。 ・ 木育に関し、アカデミーで地域の指導者間の連携を図り、ぜひ木育を展開していただきたい。 ・ 親として、林業は危険だから子に就職させたくないと思われているのではないか。安全対策がされていることを一般の親は知らない。そういう情報を説明すれば、林業も就職先の一つとして親も認めるのではないか。	向くようにしていく。 ・ 木遊館や森林活用推進課とも連携し、今後も木育を担う人材を育成していく。 ・ 他産業に比べて林業での労働災害は多いため、安全性と経済性を両立させる技術者になるため教育を実施している。今後はオープンキャンパス等への付き添いの親に対し、安全対策等について積極的に説明していく。	・ アカデミーではぎふ木育指導員を3名育成することができた。また、木遊館の協力のもと、視覚障がい者に向けた木育活動について、学生が課題研究に取り組み成果を公表した。 ・ オープンキャンパスでは付き添い 47 名を含む 126 名の参加があり、林業の安全対策についてスライドや防護具を実際に見せて説明した。
（８）法令等の遵守	３（ほぼ適切）	特になし		
（９）社会貢献・地域貢献	４（適切）	特になし		
（10）国際交流	４（適切）	・ ドイツのロッテンブルク林業大学と連携しているが、可能であれば、国際的な視野で森林・林業を捉えられるよう、アジアや他の地域、これからの地球環境を考える上で連携すべき相手先を模索すると良いのではないか。	・ アジアでは、岐阜県と中国江西省とで連携協定を締結しており、今後、情報交換等が出来ればと考えている。	・ 中国江西省林業局職員を岐阜県林政部との交流促進研修生として受け入れ（8/18 ～ 10/30）、交流を図った。

評価項目	委員の意見等	対応方針	
専門技術者教育	特になし		
生涯教育	・　桜、梅や栗の木など、個人の家の木でもその地域の財産となっているような木が、後継者がいないことで伐採されてしまうことがある。地域で支えあって身近な生活の中にある木々を守り、次世代に伝えていけるような、そのための知識を学べる場所があったら良いと思う。	・　地域の課題として市町村等とも解決方法を話し合っていただき、助言や技術指導等の要請があれば対応していく。	・　事案はなかったが、今後も助言や技術指導等の要請があれば対応していく。
産学官連携(コンソーシアム)	特になし		